

序 文

本プロジェクトの最終年度にあたって、これまでとり上げることが出来なかったいくつかの課題について、専門家を招聘し、全体研究会を開催した。神道研究者である鎌田東二氏（京都大学）からは「神道から見た仏教」について、長年にわたって「共生」を研究課題としてきた東洋大学の学長、竹村牧男氏からは「仏教と環境」について、化学研究から仏教学研究に転じた経歴を持つ佐々木閑氏（花園大学）からは「仏教と科学」について、医の倫理問題に長年取り組んで来た仏教学者、早島理氏（龍谷大学）とビハーラ活動の先駆者である長倉伯博氏（浄土真宗善福寺住職）からは「仏教と医療」についてお話を聞かせて頂いた。その一端を伝えるべく、鎌田氏の講演録を掲載する。

本プロジェクトの一つの成果は、日本仏教の未来を考えるうえで、近年蓄積されつつある「近代仏教」研究の重要性に気付かされたことである。その第一人者である林淳氏（愛知学院大学）から近代日本仏教学の形成について直接お話を聞いたのは、大変貴重であった。さらに、近代史研究者の藤原正信氏（龍谷大学）からは、歴史に埋もれた明治の仏教改革論者の生涯を歴史学の地道な方法論によって再構築する重厚な講演を聞かせて頂いた。

昨年度の全体研究会に御呼びした宗教学者の川橋範子氏（名古屋工業大学）から「ジェンダーを語らない日本仏教に未来はあるか」という重大な問題提起を突きつけられた本プロジェクトは、少しでもそれに答えるべく、「現代日本仏教とジェンダー」についてワークショップを開催した。日本仏教寺院の現状を熟知する宗教人類学者、マーク・ロウ氏（マックマスター大学）には三人の女性僧侶の事例を報告して頂き、浄土真宗本願寺派の僧侶でもある宗教学者、本多彩氏（兵庫大学）には本願寺派における女性ないし女性僧侶の位置について報告して頂いた。さらに、ナースとして緩和ケア病棟に勤務したことがあり、死別ケアの実践を先導する尼僧、飯島恵道氏（曹洞宗東昌寺住職）からは宗教の現場における女性僧侶の「痛み」を如実に指摘する報告をして頂いた。最後に、川橋氏から三人の報告に対してなされた総括的なコメントを掲載することにより、ワークショップの内容の一端を想像して頂きたい。

最後に、近代仏教研究のリーダーの一人である吉永進一氏（舞鶴工業高等専門学校）の提案により、仏教伝道協会他と共催で「アジア仏教：複数の植民地主義と複数の近代化」という国際ワークショップを開催した。2日間にわたり、主として若手の近代仏教研究者が、日本のみ

ならず，中国や朝鮮などアジア各地における「仏教の近代化」の諸相について報告し，それに対して，先輩研究者たちがコメントする形で行われた。ここには概要のみを掲載する。

龍谷大学アジア仏教文化研究センター
センター長 桂 紹隆